～IBDのチーム医療を考える③～

蒲郡市民病院

「ドクターTANIDAのIBD相談室」を連載中の谷田論史先生が勤務する蒲郡市民病院では、炎症性腸疾患（IBD）の治療に対し積極的に顆粒球吸着療法（GMA）を導入しています。

今回は、GMAの治療に携わる臨床工学技士（CE）の深海さんと谷田先生にご登場いただき、蒲郡市民病院におけるGMAの取り組みについてお話をうかがいました（編集部）。

谷田先生（左）とCEの深海（ふかうみ）さん（右）

GMAと透析の違い

深海さん　透析とGMAはどちらも太い針を腕に刺すため、ある程度の侵襲が否めない点は似ていますが、治療そのものは「似て非なるもの」です。

ごく簡単に言うと、透析は体内の毒素や水分を取り除く治療です。透析の患者さんは腎臓がうまく機能せず、尿が作られない状態のため、週3回ほど通院して透析を行う必要があります。

一方、GMAは患者さんの血液を特殊なカラムに通し、炎症の原因となる物質（顆粒球）を取り除く治療です。また、透析のように週3回ずっと通い続けるのではなく、治療回数や期間はあらかじめ決まっています。

谷田先生　GMAの適応は、基本的には中等症以上のIBD（クローン病、潰瘍性大腸炎）患者さんです。ステロイドを使っても十分な効果が得られない時、当院では分子標的薬やJAK阻害剤にGMA（週2回の集中治療）を加える併用療法を行っています。

深海さん　谷田先生は透析センターに頻繁に足を運んでくれて、患者さんに声をかけてくれます。少し不安げな患者さんの表情がふわっと和らぐのを見ると、私たちCEも安心します。

GMA治療におけるCEの役割

深海さん　私たち臨床工学技士はCE（クリニカルエンジニア）と呼ばれています。CEは血液浄化装置や人工呼吸器、人工心肺装置などを操作する医療機器の専門家（国家資格）です。今回、挙げていただいたGMAについては、対応できることは積極的に関わっています。

例えば、患者さんのお話を聞くことです。不安な点や疑問がないかどうか、つねに耳を傾け注意深く観察するようにしています。場合によっては（タイミングを見計らい）こちらから声をかけることもありますよ。すると、「本当に大丈夫かな」と気持ちを吐露する患者さんもいます。そんな時は、再度GMAについて説明をしたり、具体的な改善例（下痢や腹痛が治まるなど）をお伝えすることで、少しずつ前向きになってくれる方も多いです。

GMAを受けるにあたり、患者さんはどのようなことに不安を感じているのでしょうか？

例えば「針が太い」という話題があがりますが、私が臨床の現場で感じたことを率直にお話しすると、穿刺についてはみなさんすでにわかってくれていて「頑張ります」と言ってくれるんですよ。それよりも、「効果」を気にされる方が多いと思います。実際、「本当に症状が改善するのか」「どのくらいで効果が出るのか」と聞かれることがあります。そんな時は、先述のように改善例をお伝えしたり、再度GMAの作用機序についてご説明することもあります。また、「一緒に頑張りましょう」と声をかけたりもします。実際、回数を重ねるごとに症状が改善してくると、患者さん自ら「頑張って続けてみます」と言ってくれることも多いですよ。先日は、「あと何回（GMAを）やるの？」と聞かれ、残りの回数をお伝えすると、「わかった、頑張るよ」とベッドに向かった患者さんがいました。私も頑張らないと！と思いました。

谷田先生　GMAは10回で1クールの治療です。最初の数回で効果が出始めたとしても、最後（10回目）までしっかり続けてこそ、意味のある治療。

それを深海さんが上手に患者さんに伝えてくれるので助かっています。

当院のCEは深海さんをはじめみなさんがGMAに対する高いモチベーションをもっています。「一緒に乗り越えよう」という気持ちが、患者さんにも伝わるのでしょう。これからもよろしくお願いします。

深海さん　先日、GMAの治療中にある患者さんがご自身の関節症状について「今まで（関節のことを）相談して良いのかわからなかった」と語ってくれたことがありました。私も、もっとIBDについて勉強して患者さんといろいろなお話ができるようになりたいです。

谷田先生　患者さんが深海さんに素直な気持ちを打ち明けたというのは、GMAを続けるうちに信頼関係ができてきたということですね。例えば、GMAを受けている患者さんにとって、それが良い治療なのだとわかれば「一緒に頑張ろう」というモチベーションがチーム（患者さん・医師・看護師・CE）で共有できます。その積み重ねが当院での良好な成績に反映されているのでしょう。

蒲郡市民病院「透析センター」スタッフのみなさん

深海さん　IBDの症状に悩んでいた患者さんが、GMAを受けて「楽になった」と喜ばれる姿を見ると、私もとても嬉しいし、同時にやりがいを感じます。自分の存在意義を実感できるCEの仕事をこれからも頑張って続けていきたいです。

ドクター TANIDA から読者の皆さんへメッセージ

当院では一人ひとりの患者さんに合う治療法を患者さんと一緒に相談しながら選択しています。また、定期的に内視鏡検査を行うことで治療効果を判定し、チームで共有しながらさらなる治療方針を検討します。

GMA のみならず、１回で症状を消失させる治療法は現在のところ存在しません。繰り返すこと、継続することがとても大切です。日々の積み重ねが良い結果につながるのではないでしょうか。

この号が発売される頃には、当院で IBD の新しい治験がスタートしていると思います。TANIDA は名古屋市立病院で多くの治験に携わりました。その経験を活かし、今後も新規治療薬の開発に協力していく所存です。みなさんにも、ぜひ前向きに治療に取り組んでいただきたいと思います。TANIDA と一緒に頑張りましょう！